

白居易「新樂府」での一聯換韻について

一

埋田重夫「白居易「新樂府」五十首の修辭技法」(『中國文學研究』第四十期 二〇一四年十二月)は、白氏「新樂府」に關する様式に關する全面的檢討の論文といえる。しかし、そこで取り上げられているのは、内容との關連した部分を中心としたものであり、もう少し純粹に様式論として、明確にできる部分があるのではないかという印象を受けた。つまり、なぜ白氏「新樂府」が特異であるのか、ぼんやりしているということである。特異點が述べられているが、別に計量化されてるわけでもなく、印象的に點描しているといえる。それでは、筆者自身は、批判をする以上、こうした點を明確にできるのかという反問をして見たい。もちろん、筆者は、白詩の專家とはいいがた

水 谷 誠

いが、これまでの研究から得た成果をこの「新樂府」に應用して、その特異の一端を示すことにしたい。

その前に、筆者がこうした疑問を持った理由について述べておきたい。先の論文で、各新樂府での換韻數が例示され、その頻繁な實態が明らかにされた。これはこれでとても重要で、今まであまり注意されてこなかった。しかし、その換韻の實態が分類されておらず、どのような形態であるのか、不明であった。蟬聯體での換韻が取り上げられることはあっても、何聯での換韻であるのかはあまり言及がない。確かに「しりと文」⁽¹⁾の蟬聯體も興味深い事實であるが、それがどのような換韻實態を伴っているのか、についても論及すべきであろう。ただし、本稿はこのような關心とは別に、一聯換韻の持つ意味について中心に考えることにする。

二

筆者は、『詩聲樸學』第七章「仇氏の「一頭兩脚體」について」で一聯換韻を取り上げたことがある。その一二三頁に杜甫の一聯換韻「の特色は、一首（徐卿二子歌）を除いて、必ず詩の冒頭または末尾に現れることである。」すなわち、一聯換韻は、二句末尾を押韻させて、すぐに別の韻に變えることから、その二句を際立たせるといふ役割を持つことになる。このため、詩の冒頭または末尾に杜甫は用いたのであろう。この點で、杜甫が一聯換韻を冒頭または末尾に用いたのはよくわかる事實である。

もし、かりにこれを何聯かに重ねて用いたらどうなるか、という問題が浮かび上がってくる。恐らく、短い一聯ごとに換韻すると、散文的な印象が強くなるかもしれないし、強調の度合いがぐくくなるかもしれない。どのようになるのかは、それぞれの實例を見た上で判断することにしたい。そこで、白氏がこの一聯換韻をどのように用いているのか、という點に關心がそえられることになる。とりわけ、「新樂府」において、どのようなものであるのか、興味深くなってくる。

ただし、ここでは一足飛びに白詩に行くのではなくて、少し寄り道をして見たい。というのは、形式に雕琢をこめた杜甫以後、新たな形式を求めて、絶えず變化していたことが予想され

るからである。つまり、杜甫・白居易の二點でものを見るのではなく、そこにもう一つ點を入れて、三點で見ようと思う。そうすることでより立體的になり、より説得力が増すと考えるからである。その第三點として、韓愈を取り上げたい。そこで、韓愈の一聯換韻から見ていくことにしたい。

三

ここでは、韓愈の一聯換韻を取り上げることにする。本稿では、これをAタイプ換韻とする。なお、(A)と例示の中では略記する。ちなみに、使用テキストは、『詩聲樸學』と同じく『朱文公校注昌黎先生集』（國學基本叢書本）を使った。整理の都合上、K・01と言うようにナンバリングをした。また、所屬韻とA以外の個所では括弧内に句數を示した。

卷一

K・01「琴操」十首 其四「越裳操 周公作」 雜言

上平・支・之(A)↓平聲・眞、欣、先(四)↓上聲・麌、馬(四)
↓平聲・眞、諄、魂、先(四)

K・02「琴操」十首 其六「岐山 周公爲大王作」 四言

上平・東(四)↓下平・陽(四)↓上聲・語(A)↓上平・脂(A)

K・03「琴操」十首 其八「雉朝飛操 牧犢子七十無妻……」

雜言

入聲・質、術(四)↓上平・微、齊(A)↓入聲・屋、覺(A)↓上平・微、齊(四)

卷二

K 04 「古風」 五言

下平・庚(四)↓去聲・遇、暮(A)↓入聲・昔(A)↓上平・微(四)↓入聲・質、職(四)

K 05 「汴州亂」二首 其二 七言

上平・支、脂(A)↓上聲・馬(A)↓下平・歌、戈(A)

K 06 「利劍」 雜言

下平・侵(四)↓入聲・薛(四)↓下平・先、仙(A)

卷三

K 07 「汴泗交流贈張僕射」 七言

入聲・覺、藥(A)↓上平・支、之(四)↓去聲・映、徑(A)↓上平・支(四)↓去聲・禡(A)↓上平・模(四)↓入聲・德(A)

K 08 「雉帶箭」 七言

入聲・月、沒(四)↓下平・歌、麻(四)↓去聲・箇、過(A)

K 09 「贈鄭兵曹」 七言

下平・先(A)↓上聲・有、厚(A)↓下平・陽、唐(四)↓上聲・有(A)

K 10 「桃園圖」 七言

下平・陽、唐(四)↓上聲・馬(A)↓上平・支、之(四)↓入聲・質、術(四)↓下平・麻(四)↓上聲・語、麌(四)↓下平・先、仙

白居易「新樂府」での一聯換韻について(水谷)

(四)↓去聲・至、志(四)↓下平・庚、清(四)↓去聲・暮(A)↓上平・眞(A)

K 11 「東方半明」 雜言

入聲・月、沒(A)↓上平・之(A)↓上聲・琰、忝(四)

K 12 「贈侯喜」 七言

上聲・旨、止(四)↓下平・尤(四)↓上聲・止(四)↓上平・支、脂、之(十六)↓去聲・御(A)

K 13 「八月十五夜贈張功曹」 七言

下平・歌、戈(四)↓上聲・麌、姥(A)↓下平・豪(八)↓上聲・旨、止(A)↓上平・刪、山(八)↓下平・歌、戈(五)

K 14 「永貞行」 雜言

去聲・映、勁(A)↓上平・支、脂(六)↓上平・寒、桓(十)↓上聲・麌、姥(四)↓下平・蒸、登(十七)

卷四

K 15 「三星行」 雜言

上聲・厚(四)↓下平・陽(四)↓上平・文、桓(A)↓上平・魚(A)↓下聲・眞、先(四)

卷五

K 16 「聽穎師彈琴」 五言

上聲・語(A)↓上平・陽、唐(十六)

K 17 「短燈檠歌」 七言

下平・陽、唐(四)↓入聲・陌、麥(四)↓下平・先(A)↓去聲・

至(四)

卷六(換韻詩はあるが、Aタイプの換韻例は見えない)

卷七

K 18 「送僧澄觀」 七言

上平・支、脂(八)↓入聲・昔(八)↓上聲・馬(A)↓上平・虞、
 模(A)↓去聲・至、志(A)↓上平・眞(四)↓入聲・屋↓下平・
 先、仙(四)↓去聲・問(A)↓上平・鍾(A)

K 19 「奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花……」 雜言

去聲・映、勁(四)↓入聲・屋(A)↓下平・歌(四)↓上聲・止
 (A)↓上平・灰、哈(六)

K 20 「記夢」 七言

上平・元、痕、山(四)↓入聲・屋、燭(A)↓上平・支、之(A)
 ↓去聲・嘯、笑(A)↓下平・唐、庚(A)↓去聲・笑、號、過
 (六)↓上平・元、寒、桓(六)↓去聲・映、勁(A)↓上平・山
 (A)

卷十九

K 21 「送陸欽州詩序」 雜言

下平・陽、唐(四)↓下平・尤(A)↓去聲・笑、號(四)

外集 卷一

K 22 「苦寒歌」 雜言

下平・尤(四)↓下平・先(四)↓入聲・質、術(A)

以上、二十二首において、Aタイプの換韻例を見ることができた。韓愈のAタイプを含まない換韻詩が十七首ある。韓愈の換韻詩は全體で、三十九首と取り立てて多いとは言えない。⁽³⁾そのうち、換韻詩の五割強にAタイプの一聯換韻がある。まず、これらについて分析を加えてみたい。

まず、杜甫が用いた詩の冒頭か末尾に現れるものを見てみたい。ただし、杜甫より後の時代に位置する韓愈は、このAタイプの換韻を二回連續させることもある。これも詩の冒頭か末尾に現れるグループの中に入れてみることにする。

まず、それぞれの詩に振った番號によって示すことにする。

K 01・K 02・K 06・K 08・K 09・K 11・K 12・K 14・

K 16・K 22

このグループは十首と、半分近くをしめる。杜甫以來の傳統的な用い方と言える。これらの詩を除いた十二首がどのようになっているのかを見てみたい。

最初に、K 05に注目したい。すべてAタイプの換韻で通している。ただし、これは短詩であることによって、Aタイプの換韻連續のくどさは救われることになる。しかも、戰亂での緊張を述べる點で、このような短い換韻でそれを促すことになるであろう。⁽⁴⁾

次に左右對稱を強調するためのAタイプの換韻例について、見てみたい。このような用い方は、杜甫にない新たな展開と言

える。たとえば、K₁₃を見てみると、Aの後に八句での換韻を繰り返す。その前後に、それらとは異なる句数の換韻を付ける。ちょうど、(四)／A(八)・A(八)／(五)と真ん中の・を示すところで左右對稱になっている。これに屬するものが、K₁₃以外に

K₀₃・K₀₄・K₀₇・K₁₅・K₁₉・K₂₁

六首見える。K₀₃は、全くの左右對稱になっている。K₀₄は、左右對稱に、さらに四句を足す形になっている。K₀₇は、A＋四句の純粹なくり返し。K₁₅は、完全な左右對稱になっている。K₁₉は、四句＋Aのくり返し。K₂₁は、Aを中心とした左右對稱になっている。このような對偶性を効果的に形作るためにAタイプの換韻を用いていることがわかる。

残りの四首についていえば、K₁₀では、詩の末尾に現れるものに、前半部にAタイプの換韻を挟んだ例といえることができる。大きく見れば、最初の詩冒頭・末尾グループに入れることができるであろう。K₁₇は、Aタイプの換韻を左右對稱にするものの前半に四句の換韻が付いたものとすることができる。したがって、これは對偶性のグループとなる。K₁₈は、長篇の詩であることから、前半の對偶性部分(八・八・A・A・A)と詩末尾とが合わさっているものであるとすることができ。K₂₀もK₁₈と同様である。前半が對偶(四・A・A・A・A・六・六)で後半が詩末尾となっている。

白居易「新樂府」での一聯換韻について(水谷)

以上のように、杜甫よりは複雑であるが、Aタイプの換韻を基準に取ると、このように整理できる。

形式		例番號	
① 詩冒頭・末尾に(A)の例		K ₀₁ ・K ₀₂ ・K ₀₆ ・K ₀₈ ・K ₀₉ ・K ₁₁ ・K ₁₂ ・K ₁₄ ・K ₁₆ ・K ₂₂	
② (A)のみ連續例		K ₀₅	
③ 對偶的に用いる(A)の例		K ₀₃ ・K ₀₄ ・K ₀₇ ・K ₁₃ ・K ₁₅ ・K ₁₇ ・K ₁₉ ・K ₂₁	
④ ①と③の混合例		K ₁₀ ・K ₁₈ ・K ₂₀	

四

韓愈における一聯換韻を見た上で、次に白居易での一聯換韻を見てゆきたい。ただし、ここでは「新樂府」とそれ以外での例に分けて見てゆきたい。白居易詩における特色と「新樂府」における特色とを分けて考えたいからである。なお、使用テキストは『詩聲樸學』と同じようにここでも、平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』(同朋舎 一九八九年十月)の底本である那波本を使用している。また、換韻例示は、簡略化して使用韻は省略した。最初に、「新樂府」以外の例を見ることにしたい。

中國詩文論叢 第三十四集

卷二

0119 「歎魯二首 其一」五言

A→A→四聯

卷十二

0578 「短歌行」雜言

二聯→A→A→四聯

0583 「送張山人歸嵩陽」雜言

一聯→A→三聯→A→A→A

0584 「醉後走筆、酬劉五主簿長句之贈……」七言

一聯→一聯→一聯→一聯→一聯→一聯→一聯→A→二聯

二聯→二聯→A→二聯→二聯→二聯→A→二聯→二聯→二聯

A→二聯→二聯→A→A→二聯→二聯→二聯

0590 「山鷓鴣」雜言

四聯→二聯→二聯→A

0591 「放旅鴈 元和十年冬作」七言

A→二聯→A→A→四聯

0592 「送春歸 元和十一年三月十一日作」雜言

A→A→A→A→二聯→二聯

0593 「山石榴寄元九」雜言

一聯→二聯→A→四聯→二聯→A→二聯→三聯

0594 「畫竹歌」七言

A→A→二聯→四聯→A→二聯→二聯

0595 「真娘墓」雜言

一聯→一聯→A

0596 「長恨歌」七言

四聯→二聯→二聯→A→二聯→二聯→A→二聯→A→二聯→二

聯→二聯→二聯→二聯→A→A→二聯→二聯→二聯→二聯→

二聯→二聯→A→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→

四聯

0598 「長安道」七言

一聯→A

0600 「隔浦蓮」五言

一聯→A

0602 「琵琶引」七言

A→A→二聯→A→二聯→A→二聯→A→A→二聯→A→二聯

二聯→A→九聯→二聯→二聯→二聯→八聯→三聯

0604 「簡簡吟」七言

A→四聯→A→A→二聯

0607 「醉歌」雜言

四聯→A

卷十九

1304 「寄李蘇州、兼示楊瓊」七言

A→二聯

卷五十一

2202 「霓裳羽衣歌 和微之」七言

A → A → A → A → A → 二聯 → A → A → 六聯 → 四聯 → 二聯 → 二聯
 ↓ 二聯 → A → A → 二聯 → 二聯 → 二聯 → 二聯 → 八聯

2203 「小童薛陽陶吹簫築歌」七言

A → A → 二聯 → 二聯 → 二聯 → A → 二聯 → A → 二聯 → 二聯

2238 「醉題沈子明壁」七言

二聯 → A

2239 「勸酒」七言

五句 → 二聯 → 二聯 → A

卷六十二

2969 「履信池櫻桃島上、醉後走筆……」五言

二聯 → A → 二聯 → 二聯

3003 「和裴令公一日日一年年雜言見贈」雜言

三聯 → A → 四聯

以上、「新樂府」以外では、二十三首の一聯換韻を含む作品を得ることができた。換韻詩が全體で五十三首であることから、約半数が一聯換韻を含むものと言えるであろう。韓愈よりは比率は少ないが、作品数はほぼ同じである。しかし、これは「新樂府」を含まない数であることから、若干注意をしておきたい。まず、傳統的な①「詩冒頭・末尾での一韻換韻」に該当するものについて、ここでは傍線を引いておいた。合計で十一首と

白居易「新樂府」での一聯換韻について（水谷）

約半数を占める。大きく見れば、0602「琵琶引」・2202「霓裳羽衣歌 和微之」・2203「小童薛陽陶吹簫築歌」などを含めても良いかもしれないが、ここでは保留をしておきたい。「新樂府」での例を見ながら、判断すべきであろう。ともかくも、杜甫以來傳統的な一聯換韻の用法が中心となっていることは、容易に見て取れるであろう。

それに引き替え、③「對偶的に用いる一聯換韻」の用法が、白居易には見て取れないことに注意したい。一聯換韻前後の換韻数が異なっている。より複雑な形態で用いている。ただ注意しておきたいのは、冒頭末尾以外では、一聯換韻を三度続けることはないということである。右の例示において、中間部分にAが三つ並ぶことはないのである。

ここで言えることは、傳統的な①「詩冒頭・末尾での一聯換韻」の用法を中心としつつも、詩の中間部分ではより複雑な換韻變化をさせていると言えるであろう。⁽⁵⁾

五

それでは、白居易の「新樂府」がどのように一聯換韻を用いているのかを見てみたい。四と同様に例示することにする。なお、「新樂府」では奇数での換韻もある。この部分では、句數のみを記す。また、聯での表示になじまないところもある。この部分も句數で表す。さらに、長短句では、どのように一句と

中國詩文論叢 第三十四集

判斷するの、微妙な點もある。以上の認定は、すべて筆者の判斷によることを申し添えておきたい。

卷三

0125 「七德舞」雜言

三句→三句→三聯→四聯→A→A→二聯→三句→二聯

0126 「法曲歌」七言

三句→五句→A→A→A→A→A→A

0127 「二王後」雜言

一聯→A→A→A→A→三聯

0129 「立部伎」雜言

三聯→A→二聯→二聯→A→A→A→A

0130 「華原磬」雜言

A→A→二聯→A→二聯→二聯→二聯

0131 「上陽白髮人」雜言

一聯→A→A→四聯→二聯→二聯→二聯→A→二聯→三聯

0132 「胡旋女」雜言

一聯→二聯→A→二聯→A→A→A→A→二聯→三句

0133 「新豐折臂翁」七言

一聯→A→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→A→A→二聯→A

→一聯→三句→二聯

0134 「太行路」雜言

A→A→二聯→二聯→A→A→二聯→A→六句→三句

0135 「司天台」雜言

一聯→A→二聯→A→A→二聯

0136 「捕蝗」七言

A→A→二聯→二聯→A→A→A→A→A

0137 「昆明春水橋」雜言

一聯→二聯→二聯→二聯→A→A→五聯

0138 「城鹽州 貞元壬申歲、特詔城之」雜言

A→A→二聯→二聯→A→二聯→二聯→A→二聯→二聯→二聯

0139 「道州民」雜言

A→A→三句→A→二聯→A→二聯→二聯

0140 「馴犀」七言

A→A→二聯→A→二聯→二聯→A→二聯→二聯→A

0141 「五絃彈」雜言

一聯→A→A→A→二聯→二聯→二聯→A→三句→三聯→二聯

0142 「蠻子廟」雜言

三句→A→A→A→A→二聯→二聯→A→二聯→A→A→A→A

一聯

0143 「驃國樂 貞元十七年來獻之」雜言

一聯→A→二聯→A→A→二聯→A→二聯→二聯→A→A→A

0144 「縛戎人」雜言

A→A→A→二聯→二聯→A→A→A→二聯→A→A→二聯→A

二聯→A→二聯→二聯→二聯
卷四

0145 「驪山高」七言

A→A→三聯→四聯→A→A→三句

0146 「百鍊鏡」雜言

二聯→A→六聯

0147 「青石」七言

一聯→A→五聯→二聯→二聯

0149 「西涼伎」雜言

三聯→一聯→A→二聯→一聯→A→A→一聯→A→A→二聯→
一聯

0150 「八駿圖」七言

A→A→三聯→A→二聯→一聯→A→A→三聯

0152 「牡丹芳」雜言

十六聯→二聯→A→二聯→二聯

0153 「紅線毯」雜言

五句→A→二聯→A→A→二聯→二聯

0154 「杜陵叟」雜言

A→A→A→A→A→二聯→二聯→A→A

0155 「繚綾」七言

A→A→A→A→二聯→A→A→二聯→三聯

0156 「賣炭翁」雜言

白居易「新樂府」での一聯換韻について（水谷）

A→二聯→A→二聯→A→三聯

0157 「母別子」雜言

A→二聯→A→五聯→二聯

0158 「陰山道」雜言

一聯→A→二聯→二聯→A→二聯→二聯→A

0159 「時世粧」雜言

A→A→二聯→A→二聯

0161 「陵園妾」雜言

A→A→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯→二聯

0162 「鹽商婦」雜言

四聯→二聯→二聯→二聯→三聯→A

0163 「杏爲梁」雜言

一聯→三聯→二聯→二聯→三聯→A

0164 「井底引銀瓶」雜言

三聯→A→二聯→二聯→二聯→二聯→A→A→A→二聯

0165 「官牛」七言

A→A→二聯→A→三句

0166 「紫毫筆」雜言

三聯→二聯→三聯→A→A

0167 「隋堤柳」雜言

一聯→A→二聯→A→四聯→三聯→二聯

0168 「草茫茫」雜言

中國詩文論叢 第三十四集

A→四聯→二聯→二聯

0169「古塚狐」雜言

A→A→A→二聯→A→A→A→A→A→二聯

0170「黑潭龍」七言

A→二聯→A→A→A→二聯→二聯

0172「秦吉了」雜言

三聯→三聯→A→A→六句

0173「鵑九劍」七言

A→A→A→二聯→A→三聯

0174「采詩官」雜言

A→A→十二聯

以上の五十首「新樂府」の中で、一聯換韻をしてないものは、0128「海漫漫」雜言・0148「兩朱閣」雜言・0151「澗底松」七言・0160「李夫人」雜言・0171「天可度」雜言の五首のみである。比率でいえば、一割にしかならない。この点においても、「新樂府」は、換韻においても特異であるといえる。

次に①「詩冒頭・末尾での一聯換韻」に該当するものについて見てみたい。これを作品番號と詩題とを取り上げてみると、0126「法曲歌」七言(Aの五連續は異様である)・0130「華原磬」雜言・0136「捕蝗」七言(これもAの五連續)・0154「杜陵叟」雜言(これも

Aの五連續)・0161「陵園妾」雜言・0162「鹽商婦」雜言・0163「杏爲梁」雜言・0165「官牛」七言・0166「紫毫筆」雜言・0168「草茫茫」雜言・0173「鵑九劍」七言(これはAの三連續)・0174「采詩官」雜言の十三首である。中に一個所だけAを挟む場合も、この①グループに含めたが、比率としては三分の一弱である。これは、同じ白居易でも非「新樂府」での換韻傾向と大きく異なっていると言える。また、注目すべき点として、Aで示す一聯換韻の連續(最大は五連續)が有ることである。この点については、後に再説したい。

②の「Aのみ連續例」で終始するものはない。しかし、Aの連續する例は、頻發するので③や④について考察した後に、また取り上げることにしたい。

③「對偶的に用いる一聯換韻」について見てみると、0133「驃國樂 貞元十七年來獻之」・(014「縛戎人」については④に含める)・0149「西涼伎」・0156「賣炭翁」・0167「隋堤柳」などの四首が強いてあげられる。ただ、これらの多くは、雜言體であることから、韓愈での③例のように對偶性が際立つとは言いがたい点もある。對偶性の變奏とでも言いうるものだろう。

④の①と③の複合型について見てみると、0138「城鹽州 貞元壬申歲、特詔城之」・0139「道州民」・0140「馴犀」・0144「縛戎人」の三首ぐらいであろう。これらの詩も雜言體であることから、對偶性の部分はそれほど目立たないであろう。

以上の(②を除く)①③④の各グループを合計しても、二十首にしかならない。①の「冒頭・末尾での一聯換韻」が多く占めるものの、それでも「新樂府」三分の一にもならない。杜甫は言うまでもなく、韓愈においても、果ては「新樂府」を除く白居易の古體詩においても、一韻換韻の用い方が「新樂府」において大きく異なっていることが見て取れるであろう。

そこで注目したいのが、先の①グループで注目し②「Aのみ連續例」で後述するとした「Aの連續例」のケースについて見てみたい。これを明確にするために、先の例示の部分でAをさん連續する部分に傍線を引いてみた。これに該当する例が、0126「法曲歌」・0127「王後」・0129「立部伎」・0132「胡旋女」・0136「捕蝗」・0141「五絃彈」・0142「蠻子廟」・0143「驃國樂 貞元十七年來獻之」・0144「縛戎人」・0154「杜陵叟」・0155「繚綾」・0164「井底引銀瓶」・0169「古塚狐」・0170「黑潭龍」・0173「鷓九劍」の十五首にのぼる。これに該当するものは、①グループよりも多い。このような一聯連續換韻を多用するという点で「新樂府」の一端を特徴付けられるのではないだろうか。

韓愈のところで述べたように、このような一聯換韻の連續は、韓愈の場合精神の緊張を強調したい時に用いたものである。白居易も同様に考えて良いであろう。非「新樂府」では、一聯換韻が三回以上連續するのは、0583「送張山人歸嵩陽」・0592

白居易「新樂府」での一聯換韻について(水合)

「送春歸 元和十一年三月十一日作」・2202「霓裳羽衣歌 和微之」の三首しか無い。この点で、白居易本人においても明確な使い分けがあると言えるだろう。あえて言えば、「新樂府」は作者自らが精神の緊張を強調する作品群だったのである。これは読み手に對しても、緊張を強いることになる。韻字が短い間にしばしば換わることからくる緊張感である。書かれている内容を考慮しなくてもこれを強いることになる。まして、書かれている内容が政治的メッセージを含むものである以上、倍加されることになる。この点を白居易は狙っているといえる。この緊張感を強いる方法は、狙い通りといえよう。しかし、それに對する反発も大きかった。それには、このような一聯換韻の強い緊張も預かっていることは、言うまでもないであろう。

六

以上、大まかに白居易の一聯換韻の特異性について述べてきた。もう少し細かく見れば、いろいろなことを付け加えることもできよう。しかし、大きな流れとして、杜甫での一聯換韻形態、韓愈の一聯形態、白居易の非「新樂府」(いわば通常の)一聯換韻形態に關しては、一聯換韻がもつ強調性を際立てやすい所に置くという原則が守られていたと言えよう。そうした点で、一聯換韻の連續は、くどさを持つことで、詩的表現において避けられるものであった。これを敢えて使った「新樂府」の特異

中國詩文論叢 第三十四集

性について見てもらえば、本稿の目的は達せられたと言える。このような特異な換韻と表現を結ぶものについては、改めて考えるべき問題であるが、先ほど批判した埋田重夫「白居易「新樂府」五十首の修辭技法」の中に詰め込まれてあるので、贅言は無用であろう。

〈補説〉

自著『詩聲樸學』第十章「白居易「琵琶行」における上Ⅱ去通押について」一九〇～一九二頁において、「新樂府」での上Ⅱ去通押を失記してしまっていた。換韻が複雑であることで、後に調査するつもりが、すっかり忘れてしまっていたのである。調べはすんでいたのであるが、放っておいたのである。『詩聲樸學』三校の時に気がついたのであるが、やっと一行注記を差し挟めるだけのスペースしか無かった。私のミスで、出版社はじめ皆様にご迷惑をかけたことを深くお詫びしたい。

そして、以下記入漏れの「新樂府」上Ⅱ去通押例を記しておきたい。

0131「上陽白髮人」雜言

(換韻)……老(上・浩)／號(去・號)……(換韻)

0134「太行路」雜言

(換韻)……背(去・隊)／悔(上・賄)／改(上・海)……(換韻)

0144「縛戎人」雜言

(換韻)……問(去・問)／憤(上・吻)……(換韻)

0148「兩朱閣」雜言

(換韻)……靜(上・靜)／鏡(去・映)／磬(去・徑)……(換韻)

0153「紅線毯」雜言

(換韻)……硬(去・諍)／冷(上・梗)……(換韻)

0161「陵園妾」雜言

(換韻)……限(上・產)／縵(去・換)……(換韻)

0174「采詩官」雜言

(換韻)……氏(上・紙)／置(去・志)／意(去・志)／字(去・志)／議(去・寘)／器(去・至)／媚(去・至)／瑞(去・寘)／閤(去・至)／事(去・志)／畏(去・未)／利(去・至)／刺(去・寘)以上、七首。

【注】

(1) 小説書き始めたころの夏目漱石が、しりとり文を愛用したことは、周知のことに属する。社會不滿の語句をしりとりにして、讀み手に印象づける。社會的警句を「しりとり文」にする共通性に注目しても良いであろう。

(2) もと『中國文學研究』第十六期 早稻田大學文學部創立百年記念(一九九〇年十二月)に掲載。

(3) ちなみに杜甫は百三首の換韻詩がある。蘇軾が百五十首にのぼる。取り立てて多くはないが、ある程度まと

まった数を持つといえよう。

(4) このタイプの換韻例は、後の白居易「新樂府」において、注目すべきものとなる。ただ、ここでは韓愈において、一例しかないということを強調しておきたい。また、これを「緊張の連續換韻」といいうることも申し添えておきたい。

(5) たとえば「長恨歌」で、一聯換韻が、内容轉換に用いられているところがある。玄宗の都落ちのところである。しかし、道士登場の場面では、二聯換韻となっており、特に意識して、一聯換韻をしているわけではなさそうである。この他の部分も、一聯換韻で意識して、語句を印象づけるというように思えるところもない。用韻が單純にならないための工夫であろうと思われる。